

死後の世界 第一部 死とは何か 第1章 人の構造 ④

この学び全体のアウトラインと本日の内容

第一部 死とは何か

- 第1章 人の構造
- 第2章 死についての聖書的理解
- 第3章 非物質的部分【霊魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

- 第1章 肉体の死後、人の霊魂はどこへ行くのか
- 第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

- 第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】
- 第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】
- 第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】
- 第4章 王国の後【不信者の(第二の)復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

本日は、第一部 第1章 「人の構造」の4回目です。第1回で、人の起原、構造、その継承、物質的部分【からだ】についての7つの用語、そして非物質的部分についてその全体像を説明しました。第2回から、非物質的部分の7つの要素をそれぞれ詳しく見ていきます。第2回で魂と霊、第3回で心と肉を扱いました。本日は、思考です。

	日本語	英語	ヘブル語	ギリシア語
1	魂	Soul	ネフェシュ	プシュケイ
2	霊	Spirit	ルアハ	プニューマ
3	心	Heart	レブ	カルディア
7	肉	Flesh	バサル	サルクス
4	思考	Mind	(レブ)	ノウス、フロネーマ
5	意志	Will	ラツオン	テレイマ
6	良心	Conscience	(レブ)	スネイデシス

本日の内容 思考

思考 (しこう)

へレブ ギノウス、フロネーマ

1. 聖書で使われているギリシア語原語について (派生語、関連語も見ながら)
 - (1) ノウス=認識・理解 → 人はいろいろな事柄を認識し、考える主体である
 - ① ルカ 24 : 45 「聖書を悟らせるために彼らの心ギノウスを開いて」
 - ② ルカ 10 : 27 「思いギプシュケー (魂) を尽くし、知性ギディアノイア【思考・理解】を尽くして」
 - ③ I ペテ 4 : 1 「心構えギエンノイア【思慮深く理解すること】」
 - (2) フロネーマ=熟考・思索・洞察、→ 人は深く思索をめぐらし、瞑想する主体である
 - ① ロマ 8 : 6~7 「肉の思いギフロネーマ、霊の思い」、8 : 27 「霊の思い」
 - ② I コリ 14 : 20 「物の考え方ギフレン、考え方ギフレン」
 - ③ ピリ 2 : 5 「心構えでいるギフロネオー」

2. 思考の働き
 - (1) 思考は、物事を認識し、理解し、深く思索する活動領域にかかわる。
 - (2) 思考も、罪の性質によって影響を受けて悪くなったが、メシアにあって新しくされることができる。
 - ① ロマ 12 : 2 心ギノウスの一新によって自分を変えなさい
 - ② エペ 4 : 22~24 心ギノウスの霊において新しくされ

3. 聖書は、不信者の思考と信者の思考とをはっきりと区別している。
 - (1) 不信者の思考は・・・
 - ① その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾く (創 6 : 5)
 - 下線部直訳「人の心の考えることのすべての思考へイエツァーが」
 - ② 悟りのある人はいない。神を求める人はいない (ロマ 3 : 11)
 - ギスニエイミ (何かを集めて) 組み立てる→理解する、考える
 - ③ 肉の思いギフロネーマは神に対して反抗する (ロマ 8 : 7~8)
 - ④ この世の神が不信者の思いギノエマ【思考 (←ノイエオウ考える)】をくらませて (II コリ 4 : 4)
 - 「この世ギアイオンの神ギセオス」について
 - 「世」はギコスモスではなく、ギアイオン
 - サタンは、「このコスモスの支配者」(ヨハ 14 : 30)
 - アイオン (時代精神、その時代の仕組み) のセオス (神、偶像の神、この文脈ではサタンを頂点とする悪霊全体を指す。時代の仕組みを通して人間を神の方に向けないのは悪霊たちの役割)

- ⑤ むなしい心^ギノウスで歩む (エペ4:17)、その知性^ギディアノイアにおいて暗くなり (4:18)
- ⑥ 知性^ギノウスが腐ってしまって真理を失った人々 (Iテモ6:5)
- ⑦ その知性^ギノウスと良心までも汚れている (テト1:15)
- (2) 不信者の思考は、神に反抗する。よって、神の真理に反対する神話や偶像を作り出し、進化論やビッグ・バン理論などいろいろな理論を構築しようとする。
- ① 本来は、自然界を見れば創造主なる神の存在は明らか (ロマ1:20)。
- ② しかし、人の思考はそれを受け入れたくない。神を神としてあがめたくない。
- ③ 神の存在を否定すると、その思い^ギディアロギスモス【議論・考え】は、むなしくなる。その無知な心は暗くなる (ロマ1:21)
- ④ 人が神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない【節操のない、破壊的な】思い^ギノウスに引き渡され、そのため彼らはしてはならないことをするようになった (ロマ1:28) → 思考がおかしくなると、道徳的・倫理的な腐敗につながる。
- (3) 信者の思考は・・・
- ① 思い上がらない、高慢にならない (ロマ12:3「限度を越えて思い^ギフロネオー上がってはなりません。・・・慎み深い考え方をする^ギフロネオー」、12:16「高ぶった思いを持たず^ギフロネオー」、ピリ2:3、5)
- ② 神を愛する能力を持っている (マタ22:37「心を尽くし、思い^ギプシュケー(魂)を尽くし、知力^ギディアノイアを尽くして、あなたの神である主を愛せよ」)
- ③ 霊的真理を理解できるように啓発される (ルカ24:45「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心^ギノウスを開いて」)
- ④ 神の律法に仕えることができる (ロマ7:23「私の心^ギフロネーマの律法」、7:25「心^ギノウスでは神の律法に仕え」)
- ⑤ 倫理的判定を要せず、多様な意見や立場を認めてよい事柄かどうか、そしてそのような事柄に該当する場合に、その対処はどうすべきか、について自身で適切な結論を導くことができる (ロマ14:5「それぞれ自分の心^ギノウスの中で確信を持ちなさい」)
- ⑥ 信者の思考は、キリストの思考を反映する (Iコリ2:16「私たちには、キリストの心^ギノウスがあるのです」)
- ⑦ 主のみこころを理解することができる (エペ5:17「愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい」)
- ギスニエイミ (何かを集めて) 組み立てる→理解する、考える、賢くある
 - 原文の語順に沿うと、「愚かであるな、賢くあれ (考えて理解せよ)、何が主のみこころであるかを」

4. 信仰の従順との関係

- (1) I ペテ 1:13 「あなたがたは心^ギディアノイアを引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現れるときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」・・・自分の思考をしっかりと確保して、ふさわしくない考えが入り込むすきをつくらない
- (2) II コリ 10:5 「私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごと^ギノエマをとりこにしてキリストに服従させ」・・・(1)と同じことを教えている。思考が活動することで営まれるノエマ生活を、神への完全な服従のもとに置くことが信者には必要である。
- (3) 自分の思考をしっかりと確保するということは、具体的には次の二つ。
- ① 思考の一新 (ロマ 12:2 「心^ギノウスの一新」)
- エペ 4:23 「あなたがたが心^ギノウスの霊において新しくされ」
 - 22節の「古い人」とは、罪の性質＝「肉」
 - 24節の「新しい人」とは、新しい性質＝「霊」
 - コロ 3:9～10 「古い人をその行いと一しょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識^ギエピグノーシス【完全な知識】に至るのです。」
 - 信者も、信仰に入る前はこの世によって完全にマインド・コントロールされていた。この世のプログラムが組み込まれている。したがって、信者は、神のことばを学び、記憶し、それらを深く考えることによって、自分のマインドをプログラムし直す必要がある。これが、思考の一新である。
 - 一新された思考は、神が考えるのと同じように考えることができる。そして記憶された聖書の諸原則は、マインド【思考】からハート【心】に伝わり、信者の生き方が変わる、というように波及していく。
- ② 思考を向けるべき事柄 (ピリ 4:8 「そのようなことに心^ギを留めなさい^ギロジゾウマイ (資産を数える、評価する、考える)」
- 真実なこと
 - 誉れのあること
 - 正しいこと
 - 清いこと
 - 愛すべきこと
 - 評判の良いこと
 - 徳と言われること
 - 称賛に値すること

来月9月15日は、人の構造の第5回目「意志と良心」です。これで、第一部第1章を終わり、10月20日は第2章「死についての聖書的理解」に入ります。